

# オーラル・ヒストリーと教養教育

橋本 唯子

## 1 オーラル・ヒストリーとは

オーラル・ヒストリーを訳するならば、「口述史」とでもいうべきだろうか。中村政則は「オーラルヒストリーとは個人からその戦場体験、生活体験などを聞き、文字資料からでは知ることのできない体験の個別性、歴史の細部ディテールを記録に残す作業である。あるいはその聞き書きをもとに個人史を描き出す作業である。いわば個人史から全体史を再構築する狙いを持つ。」としている<sup>1</sup>。

これまで職務上、数多くの話者に聞き取り調査を行ってきた。人びとの日々の暮らし、昔の祭礼のようす、戦地での体験についてなど、多様なテーマを聞いてきたが、回数を重ねるほどに、その難しさに頭を抱えることが増えた。難事であるのは、それが単に聞いて終わりというものではなく、「歴史資料」としての資料的価値を有するものとして練りあげる作業をともなうからであり、すなわち必然的に聞き手および編集者の力量が厳しく問われるからである。

## 2-1 オーラル・ヒストリーに必要なもの

ある女性への聞き取り調査で、代えがたい経験を得た。1947(昭和22)年、戦後初の知事選挙において滋賀県知事に立候補した、藤居静子氏。管見の限りでは、全国の立候補者中唯一の女性である<sup>2</sup>。藤居家は1831(天保2)年創業と伝えられる酒造業を営み(藤居本家)、父は町長などを務めている。静子氏は地元の高女学校を卒業後、東京女子医学専門学校へ入学、その後家業の継続に尽力しながら知事選立候補・県教育委員就任・工場誘致反対運動への関与など多くの足跡を残した。

私および当時の自治体史執筆委員数名が初めて面会したのは2008(平成20)年、1911(明治44)年生まれの静子氏が、白寿の祝いを控えた頃であった。酷暑の折、凜とした佇まいで出迎えられたことをよく憶えている。計3回、毎度数時間にわたる聞き取り調査を行ったが、オーラル・ヒストリーでは時間制限を設けることが鉄則とされていて、高齢者に対する2時間以上の調査は健康を害する危険がともなうといわれている<sup>3</sup>。その点を危惧し何度か途中で切り上げることを提案したが、決して手を抜かず最後まで質問に応え続けてくださった。内容の詳細は別稿(以下『報告書』とする)を参照されたい<sup>4</sup>が、ここでは『報告書』に記述できなかった事柄や、理解を深めるために加えた脚注での解説について記すこととする。

## 2-2 「裏を取る」こと

『報告書』では、約70ページの本文に対し、85か所の脚注を付した。医師免許を取得した静子氏の会話には、医学用語や「キモグラフィオン<sup>5</sup>」といった医学器具の名称が頻出する。ICレコーダーを何度も再生し、言葉を聞き取って、意味を調べる。一語の確認に数時間を要したことも少なくない。

また戦後、新嘗祭の御酒醸造禁止にあたりCIC<sup>6</sup>と交渉する場面ではドイツ語が使われていて、「Reisfeld」「Erntedankfesttag」など、ドイツ語を解さない私には会話を把握し意味を捉えることの難しさを痛感するばかりの作業であった。

さらに調査中、私の出身地が石川県であることを伝えると、戦前最後の滋賀県知事であった柴野和喜<sup>わきお</sup>夫が同郷であり、戦後石川県知事を務めたことから、静子氏は私に柴野の石川治政にかかる評価を尋ねられた。『報告書』に到底掲載できなかった私の返答は、「私あんまり地元の歴史をちゃんと勉強していないので、存じ上げず申しわけありません。」という極めて情けないものであった。この時点で私は柴野の名前すら初見だったのである。後日必死に資料を調べ次の調査を迎えたが、静子氏が柴野について私に再度問うことはなかった。その代わりに、多岐にわたる話題のなかで同じように想定外の質問を何度も頂戴し、答えられず浅学を取じ入るしかなかったことを、昨日のこのように記憶している。

オーラル・ヒストリーには、聞き手および編集者の力量が問われると先述した。聞いている最中・後日の確認作業・編集作業の過程で、そのことを嫌というほど理解する機会を得た点で、私にとって稀有であった。丁寧な口調のなかに、聞き手の眼識を見極めるような鋭さを含んで、静子氏が若輩者の私にまっすぐ向き合ってくださったことを忘れてはならないと、改めて銘肝する。その後も折に触れて聞き取り調査を行うなかで、話者の人生の重みを真摯に受けとめることの重要性を学ぶ端緒となった。

不完全ではあったが、『報告書』によって、戦後の地方自治制度や教育制度の確立における一過程を見、また県の条例策定よりも早期に成し遂げられた、公害問題を見据えた工場誘致反対運動の詳細を、当事者の証言によって裏付けることができた。いずれも資料が少なかった部分であり、資料と証言とが相互補完しつつ総括的把握を深める役割を果たした。

## 3 おわりに―「記憶」を「記録」すること

さて、オーラル・ヒストリーと教養教育という掲げたテーマについて、そろそろまとめる必要があるだろう。教養教育とは何かと自問すると、どうしても上記の経験を思い返す。あの時間が私にとって教養教育の基盤を得たものだったと思えるからである。

実は『報告書』に記載したのは、3回の聞き取り調査中の一部に過ぎない。証言の「裏を取る」ことが困難である、『報告書』全体からみて位置づけがたい、などがその主な理由であるが、つまり多くは分析すべき私の力量が追いついていなかったためである。静子氏亡き今、許可を得て全貌を公表できる日は来るだろうか。いつかふさわしい教養を体得し、静子氏の事績を全般的に検討したいと願う。それには戦後政治史の幅広い研究成果蓄積とともに、オーラル・ヒストリーのさらなる深化もまた求められるといえよう。静子氏の聞き取り調査データ中からは、稲田周一や服部岩吉など滋賀県知事経験者のみならず、宇野宗佑や吉田茂といった首相経験者との深い関わりも多くみることができる。これにより中村のいうところの「個人史から全体史を再構築する」ことが可能と想定できるがゆえである。

最後に、文献資料を主材料としてきた私が静子氏に数度重ねてしまった愚問に対する返答を残しておきたい。記憶が鮮明であることへの驚きと、文字で残されているならばなお確認したいという思いで、記録の有無を問うと、静子氏は「字を書くと忘れてしまいますので」、「だから自分で覚えて」とご自身の頭を指差された。頭の中に記憶することが、「一番楽でございますので」。膨大な量の脳細胞はシナプスでつながり、いくらでも着脱可能であり、だからこそ「いくら勉強しても、これで十分だということはないということです」。これこそ教養教育の深淵の一端を示す表現ではないだろうか。またこれを体現する教員であるか否か、自らに問い続けなければならないのではないだろうか。

「記憶」を「記録」することの意義とは何か。脳内に記憶し尽くすことができない私は、やはり「記録」することで残す術を見出すしかない。「記録」の残し方を追究していくことがまた、私に与えられた役割の一つであろうと考えている。

拙稿の記述についてご許可いただきました藤居本家の皆様に深謝申し上げます。

<sup>1</sup> 中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』（小学館、2008）

<sup>2</sup> 1946（昭和21）年に行われた戦後初の衆議院議員選挙においては、全国で39人の女性が当選した。しかし静子氏はこの時の選挙が少数代表の性格を持つ大選挙区制限連記制であり、女性候補者に有利に働いたとされることから、この制度に懐疑的であり、「その他大勢の参政もいいけど、たった一人がやれるというのもおもしろい」と考え知事選への立候補を決めたという（愛知川町史編集委員会編『近江 愛知川町の歴史』第2巻（近世・近現代編）（愛荘町、2010））。

<sup>3</sup> 中村尚史「記憶を記録に—オーラル・ヒストリーの射程—」（『福井県文書館研究紀要』10所収）

<sup>4</sup> 愛荘町教育委員会文化振興課編集『語り継ぐ記憶：聞き取り調査より：町史報告書』（2009）

<sup>5</sup> 『報告書』に挿入したキモグラフィオンの注は「動態記録器、筋収縮などの現象を計測する機器。」

<sup>6</sup> 『報告書』に挿入したCICの注は「Counter Intelligence Corps 対敵諜報部隊のこと」（一部抜粋）。